
この街の片隅で

月野優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この街の片隅で

【Nコード】

N7169X

【作者名】

月野優

【あらすじ】

中学を入学した不良少年の月野浩美は、入学早々問題ばかり起こしていた。

入学一週間にして先輩にも目を付けられた彼は先輩と喧嘩した日の帰り河川敷で美少女と出会ってしまう。

ある街の片隅で、不良少年と美少女とその仲間達が繰り広げる青春のストーリー。

第一章

学生への嫌がらせ、としか思えないほど山の上に設立した学校に入
学した俺は学校手前の急勾配な坂を、春だというのに汗をかきなが
ら律儀に登校している最中だった。

時間を確かめる為に取り出した携帯のディスプレイにはでかかと
PM12:30と表示されている。完全に遅刻だ。

遅刻はもちろん、あらゆる問題を起こしている俺は入学一週間にし
て既にアウトロー状態になっていた。

ようやく坂を登り終えたと思えばまた階段がある。なんなんだ、こ
の学校は……少林寺じゃあるまいし、生徒を三年間で下半身筋肉バ
カにしようとしてるんじゃないな。

すっかりやる気が削がれてしまい階段に座り込みブレザーの胸ポケ
ットに忍ばせた煙草に火を付けた。

(あー、だっりー……)

「こんの　大バカもんがー!!!遅刻しているにも関わらず、
学外で煙草を吸っているとは貴様何事か！」

近隣住民から、お宅の学校の生徒が煙草を吸っています。なんて学
校に通報があり、すぐさま駆け付けた先生達に捕まった俺は生活指
導の西山先生と担任の柘先生に生徒指導室で説教をくらっていた。

「しかもなんだ、その髪と耳は！チャラチャラしよって。学校を舐
めとるのが貴様は!!!」

この野郎、黙って聞いてりゃ良い気になりやがって。次になんか言
ったらぶん殴ってやるぞ。

「まあまあ西山先生。彼も反省してますし今日はこのへんで。ね？」
さすがは担任の先生だ。反省はしてないがよくわかってるじゃない
か。

「柘先生は甘過ぎます！だいたいそんなことだから生徒にも舐めら

れてですね」

「西山先生、ちょっとストロップ！生徒の前でそんな話は」

「あっ、これは失礼　　うおっほん。月野、貴様今度何かしてみろ。次はただじゃおかんぞ！肝に命じておけ！！！」

ピシャン！西山先生は勢いよく扉を閉めて生徒指導室から出ていった。

「月野君、入学して一週間たつけど遅刻とか多いよね？なにか困った事でもあるのかな？先生達は勉強を教えるのも仕事だけど、生徒の悩みも解決するのも先生なんだよ。だから…ね？」

ちっ、近い……見た目より幼く見える柘先生はずいつと顔を近付けてきた。制服を着たら下手すりや同い年には見えるかもしれない。

しかし、すげー良い香りがする。っていかんいかん、相手は子供の敵だ。ここはクールに……

「別に…なんもねーよ。それより早く帰りたいんだけど」

「あっそうね！それじゃ六時限はちゃんと受けてね」

それを無視して生徒指導室から出ていった。

子供の敵ねえ……教室に帰る途中、知らずに呟いていた。

別に先生が嫌いな訳ではない。そりゃあ良い先生だっているのはわかってる。ただ…理不尽な大人達が嫌いなんだ。身勝手な大人のせいで子供は辛い思いをするんだ。

さすがに六時限はちゃんと受けて今は放課後。

「ヒロ、お前また西山に怒られたらしいな！今度はなにしたんだ？俺は小学校五年生になってこの街に引っ越してきた時からずっと一緒にいる幼馴染の大河原と下校の為に靴を履き替えるべく靴箱で先程の事件をネタに話していた。

どうでもいいが、幼馴染とは美少女がデフォルトだったと思っっていたが間違いらしい。しかし、大河原はたまに押し倒したくなるよう

な女のような可愛い顔をした今話題の『男の娘』なのである。まあ本人には言わないが……

「まあな、今日はついてねーよ」

「ひひっ、でもお前らしーよ。その間抜けさが」

無邪気に大河原は笑った。ってか、それが幼馴染に言う台詞かよ。

ちよっとは情をかけてくれてもいいじゃないか！

「あっ、わりー。教室に携帯忘れてきた。待っててくんね？」

「早くしろよ。間抜け」

「うっせー！後で覚えとけよ！」

そう言つと大河原は走って行った。

騒がしい奴もいなくなつてやる事もないので携帯をいじくつていたら、急に自分の周辺だけ暗くなつたのに気付く。

顔を上げると180？はあるう、大男の二人組がいた。制服を着ているので生徒なのは間違いない。

うちの学校は上靴の色が学年によって色が違う。赤は一年、黄色は二年、緑は三年だ。この二人は黄色だから二年か。

「お前、今年入学した月野浩美か？」

「はい、そうですがなんかようすか？」

先輩ということで無難に敬語を使った。敬語が使われたから良い気になつたのかだんだんとエスカレートしていく。

「お前さあ、入学一週間で色々やってるらしいけどあんまり調子乗ってんじゃねーぞ？」

「すみません、別に調子乗ってる訳じゃないんで。用がすんだなら早くお帰りになれ。ってか早く消えるバカ」

いかん、ボロが出てきた。敬語って難しいね。やべっ、先輩AとBの顔がだんだん赤くなつてきた。

「後輩相手に背丈だけで先輩風ふかしてんじゃねーよ。お前らみたいなのが一番腹立つんだよ！お前ら二人共片腕で勝てるわ」

「てめー、人が手出さないと思つて調子乗ってんじゃねーぞ！ちよつと面借せや！！！」

先輩AとBは沸騰したヤカンのように怒っている。沸点低いな、こいつら。
入学一週間にして先輩と喧嘩。うん、後には引けないな。今日は本
当についてない……

「いてて、あいつらマジで手加減しろっの。二人掛かりは反則だ」
ブレザーを肩に担ぎ、殴られて血だらけの顔が後になり痛くなった
のを我慢しながら下校していた。
喧嘩はというと……当然負けた。漫画やドラマじゃあるまいし一対
二は一人は負けるのは当然だ。しかも180?もある奴が二人だ。
大河原はとつくに帰ったろうな。多分すげー怒ってる。明日、学校
でプロレス技をかけられる。

一つ大きな溜息を吐いて、夕日であかね色に染まる道をとぼとぼ家
へ向かって歩いた。

辺りはすっかり暗くなり通学路の途中にある河川敷にさしかかった
時、川に向かってぼっーと立し尽くしている同い年くらいの女の子
がいた。最初は不信に思ったが、何故だか彼女に吸い寄せられてい
るように近付けいていき気が付くと俺は女の子に話かけていた。

「お前、なにしてんの？」

彼女が振り返ると、それはもう相当な美少女だった。

腰まであるう艶やかな黒い髪に、キラキラと輝く宝石のような大き
な瞳、誰もが魅了する魅力的な小さな唇。俺は見惚れて言葉が出な
かった。

天使が舞い降りた！そう思った。

「え？なんかよう？うわっ、なにその顔！キモッ」

前言撤回。悪魔が降臨している。第一声がそれだったのだから最悪
だ。

「喧嘩でもしたの？しかもその顔からして負けたのね。情けない…私、不良って大っ嫌いなだよ」

「あーそうかい、邪魔したな。じゃーなブス」
そう言っていると俺は家へ帰ろうとした。

「待ちなさい！あつあ…あんた今、私にブスって言ったわね？…」
彼女を見ると俯き体をプルプル震わせている。

「私はね！不良とカボチャとブスって言われるのが大大大っ嫌いな
のよ！このヘタレヤンキー、バカアホ死ね」

カチン。流石に頭にきて三十分は口喧嘩をしていたが、女は口喧嘩は強いつてのは本当だった。相手はありとあらゆる言葉で罵つてくるのに対し、こっちはだんだん言う事もワンパターンになり私の勝ちね、なんて言い残し去って行った。

一人取り残された俺は大きく溜息をしてみとぼとぼ家へ帰った。今日は本当についてない……

疲れた。早く帰って寝よう。

学校が家へ今日の報告をしていたらしく顔が血だらけの俺は家へ帰ると説教されたのは言うまでもない。

第二章

「痛い…痛い、痛い、いつてーな！ギブ！ギブアップだ、離しやがれ」

「いいや、離さないね。昨日俺はどれだけ惨めで寂しい思いをしたかわかってんのか？」

昨日このアホは俺が放って帰ったと勘違いしているらしく、やっぱりプロレス技をかけられた。どうでもいいが、こいつは何故に女みたいな香りがするんだ。ほんとどうでもいいけど。

「昨日俺はお前をどれだけ心配して探したか…ゴミ箱、女子トイレ、女子更衣室、その他もろもろお前が行きそうな所は全部探したぞ！」
「ちよつと待て。お前俺をなんだと思っただよ」

人を変態扱いしやがって。しかも、学校の前の公園で喧嘩してたのにそこまで探すならここまで見にいよ。普通は学校の前に公園があるなら一番最初に行くと思んだか……

「まあそんな事はどうでもいい」

「よくねえ」

「その顔どうした？昨日なんかあったのか？」

スルーすんじゃねえ！とか、話の順番逆だろーが！とか、ツッコミたいところは多々あるが、まあいいや。

「まあ…喧嘩した」

「ちつ…で、どこの誰よ？相手何人だ？勝ったのか負けたのか？」

「いつきに聞くな。相手はうちの二年の二人組だ。それから…負けたよ」

「…んだよ、ちくしょう！なんで俺に言わなかったんだよ！」

大河原は頭にきたらしく険しい顔をしていた。ってかその間、女子トイレとかにいたの覚えてないの？

「俺の問題だからほっとけ。それより昨日の帰りに河川敷にすげー可愛い子がいてさ。見た目はすげー可愛いけど性格がもうすげー悪

いのよ。それで河川敷で口喧嘩なつてな。昨日はほんといつてねよ」

しかし、黙っていたら本当に可愛かった。名前とか携帯番号教えてもらわなかったのは少し惜しい気もする。

「お前、喧嘩の後は女ネタかよ。その上、初対面の女と痴話喧嘩とは、アホ通り越してやつぱりアホだな。で、どんな子だった？」

「うるせー。そうだな…まあ容姿はマジで可愛かったな。例えば…あれ。あの今こっちに歩いて来てる子みたいに黒くて長い髪に大きな目で小さいが決して子供地味で無い唇…って、ああああああああああ！！！」

「ヒ口、どうした？パンツでも見えたか？」

昨日の内面夜叉女だ。まさか同じ学校だったとは思ってもみなかったので腰を抜かすぐらい驚いていたら、あろう事か夜叉女が喋りかけてきた。

「ん？あんた昨日のヘタレヤンキーじゃない。一緒の学校だったとは奇遇ね」

奇遇ね、じゃない最悪だ。赤い上靴だから同い年かよ。

「名前も聞いてなかったし、ちようどいいわ。ちよつと来なさい」

「は？なんで俺が」

「い、い、か、ら、来なさいクズ！」

ネクタイを掴んでぐいぐい引つ張り連行される最中、大河原の顔を見たらきよとんとした間抜けな顔をしていた。助けるよ……

例の夜叉女に連行された先は屋上へ続く扉の前。

この学校は屋上を閉鎖している。まあ今の時代、当たり前的事なんだがちよつと残念な気もする。

夜叉女にまたネクタイをぐいっつと掴まれた。これどう見てもカツアゲの現場じゃね？

「私は不良が大っ嫌いな」

「そんなの昨日いつてたろーが」

「そう、だから同じ学校の生徒として見過ごす訳にはいかないわ」

「俺がなにしようとお前には関係ない」

「いいえ、関係あるわ。私はこの学年委員長だからよ。つまり、一年生の代表。あなたみたいな自分勝手に人の迷惑も考えないアホでバカで頭の悪い不良がいると私達一年生みんなに迷惑がかかるの。もしかしたら真似する子もいるかもしれない。その前にあなたをまづ更生させて二次災害を防ぐって戦法よ」

「……俺が不良って根拠はあるのか？まだなにもやってねーぞ」

「そんなの昨日の事と今のあなたの身だしなみを見れば一目瞭然じやない。髪の色もピアスも校則違反でしょ？それだけで充分よ」

くっ、反論できない。しかし、更生させます、はいわかりました、で素直に聞けるほど人間できてないんだよ俺は。

「あなたみたいなくズでも真面目に私と先生の言う事聞いてたらちよつとはましにはなるわ。それとも煙草吸って暴力してるのがかっこいいとか思ってるんなら大間違いよ。どうせドラマや漫画でも見て影響されたんでしょ？そもそもそんなヘタレじゃ不良になんか向かないわ」

「うるせーんだよ！！お前に俺の何がわかるってんだ？ああ？」
人の事を知った様な風な態度に頭がきて、つい大声をあげてしまった。廊下が反響して声が響き渡った。

「俺は不良に憧れてる訳でも不良でもない。知った様な事言うな。理不尽な大人達の言う事に振り回された俺達子供が辛い思いをする事が気に食わないだけだ」

自分でもなにが言いたいかわからない。それだとなだの勘違い反抗期バカだ。自分の思った真実を言ったのに……どうせまた罵られるだけだ。言わなきゃよかった。

彼女は一瞬なにが起きたかわからないといった感じできょとんとしていた。それから我に返り、気まずい雰囲気を変えようと、こほん

と咳払いし先ほどの人を見下したような顔とは打って変わり、いきなり真面目な顔になった。

「いい？よく聞きなさい。私はあなたを学年委員長として更生させてみせるわ。何日、何ヶ月、何年かかろうと必ずさせてみせる。そしてあなたを絶対に見捨てたりしないわ絶対に……私は日向翔子。絶対に更生させるわ」

その美しい宝石のような瞳は真つ直ぐと俺の目を見ていた。一人の人間として、対等な人間として見ているような。

「とつ、とにかく俺は不良でもなんでもない。更生とか言われようと全くもって意味がない。もうほつといってくれ……怒鳴って悪かったな、じゃあな」

階段を下りる最中、後ろから日向の声が聞こえたがあえて無視して大河原の元へ帰った。

それが日向翔子との二回目の出会いだった。

帰ってからは最悪だった。

帰ってからずっと「なにがあつた？」と大河原に何度も問いただされ、やたらしつこいので怒鳴ったら喧嘩になった。

先生には顔が怪我してただけで呼び出しをくらい、放課後まで説教。

やれやれ今日もついてない。

帰りはやっぱり大河原の姿は無く、しぶしぶ教室（鞆は持って来てませんでした。てへっ）には向かわず靴箱に直行する。

しかし、こういう日は不幸が続く。二度あることは三度ある。靴箱には昨日の先輩二人組＋なんかボス的な感じの奴がいた。

「おい、今日も一人で下校か？あつ、もしかして虐められてるのか？可哀想に。先輩達が可愛がつてやるよ」

これだから中坊は（まあ俺もだが）。高校生までなるとまだ考えが

大人になりつつあるから、一度のささいな喧嘩でわざわざ仕返しなどということもない（まあでも、やられたらやり返す、また逆もしかりなので相手が負けを認めない限り高校生でもエンドレスな喧嘩もあるけどな）。

しかし、中学は頭がまだガキなので質が悪い。負けたらもちろんだか、勝っても負けた相手の事を『また殴れる良いサンドバック』と思うバカがたまにいる。

「今日はマジで勘弁してくれ。ほんと疲れてるから」

「ああ？口の利き方がなつてねーな。それとも聞き間違えたのかな？パードウン？」

カチン。あー今ほんと頭にきた。頭にきたので思いつきり一人の先輩の腹に蹴りをした。

思いのほか、良い所に入ったらしくゲロ吐いて地べたで悶え苦しんでいた。うわあ、ばつちー。

「てめえ、あんまり調子乗ってつと昨日みたいにボコボコにすんぞコラー!!!」

突然の出来事に啞然とした先輩達は、我に振り返りかかってきた。

「はーはつはつは！そこまでだ」

なに！？新手か？これ以上、人数が増えるとキツイぞ。

そこには……サングラスをかけて頭に体操服のスポンをかぶった変質者がいた。先輩も殴るのを止めて啞然と変質者を見ている。

「俺の名は大河原ハーマイオニー。悪さをする悪党は俺が『ウインガーディアムレディおっさん』で退治してくれる！ん？あれ？なんでみんなそんな目すんの？」

「……大河原なに…やってんの？」

アホだ。アホがいる。

「え？ヒロ、なんでわかつたの？お前：まさか！魔法使えるのか？」
思いつきり頭を殴った。今ので頭の病気が治ってくれるのを願おう。

「いってー、なにすんだ！」

「なにすんだ、じゃねえ！空気読めよ！この変態KY野郎！」

先輩達もあまりのアホさに戦意喪失して、大河原をジト目で見ていた。

「変態とはなんだ。せつかくこのサングラスと体操スポン借りてきてまで助けに来てやったのに」

サングラスはとにかく体操スポンも借り物かよ。本当にアホだな……

「で、どこから借りてきた？そんなもん」

「サングラスは技術授業の先生の福田だ」

ああ、あのヤクザみたいな先生か。

「体操スポンは女子更衣室だ」

「お前、やっぱり変態だ！人の事を散々変態扱いしといて、結局自分が一番変態じゃねーか」

「うっせー！顔隠さないと後々面倒だろーが。お前が喧嘩売られてんの見つけて急いで探したら女子更衣室しかなかったんだよ！」

バカだ。バカの最強がここにいる。

「おい、ちよつといいか？」

「ああ？今それどころじゃないんだ。変質者がいるから後にしてくれ」

振り向くと、頬を思いつきり拳が当たった。

「お前ら二人のバカさ加減は充分わかった。じゃあ、バカな後輩達にお仕置きの時間だな」

「上等じゃボケ！」

入学して一週間と一日。二回目の先輩との喧嘩になった。

「いってー。マジであの筋肉ゴリラはやばかった。まだ足がガクガクすんぞ」

「ああ、なんとか勝ったけどな」

すっかり夕日で染まった道を今度は二人で肩を担ぎながら下校した。

「それでお前、サングラスと体操スポンどうした？」

「ん？ああ、あれか？サングラスは割れたから捨てた」

「お前、福田にぜってー殺されんぞ……」

奴は確実に過去に黒歴史を待つ存在だ。大河原、明日死んだな……

「で、体操スポンは？」

「ああ、あるよ？ほら！血だらけになったから捨てようと思ったんだけどよ、流石に可哀想だから洗って帰すわ」

鞆からばさつと取り出した体操スポンは血だらけで左上の名前には

『日向翔子』と書かれていた。

あつ、こいつ明日確実に死んだな、と思った。

「大河原よ、お前は良い奴だった。あばよっ！」

「え？なになに？照れるじゃんよー。でもなんで過去形？」

別れ際に言ったたぶんこれが彼の最後の言葉だったような気がする。

第三章

次の日、やっぱり大河原は福田に呼び出しされ真っ青な顔で帰ってきた。

「ヒロ、あいつは怒らせんなよ。ぜってーだ」

大人の階段登ったな大河原。

その後に全校集会が開かれ『女子更衣室窃盗事件』が発表されたのは言うまでもないだろう。その時、日向が俺達をガン見していた時はマジでビビったが。

全ての授業が終わり今は放課後。流石に先輩達も昨日ボコボコにされてこりたのか、靴箱にはいなかった。だが、新たな問題が起きた。「おい、いい加減にしてくれねーかなマジで」
さつきから日向が後をつけてくるのだ。

「あら奇遇ね、私も今帰りなのよ」

「お前、今日一日中つけてたの知ってんぞ。休み時間、昼飯も、トイレ行く時もだ」

「あら偶然ね、私もたぶんそこに用事があったのよ」

「嘘つけ！あーもういいや。なんか無駄な抵抗な気がする」

不毛な口論もする気もないので素早く靴を履き替え下校する事にした。

これはたぶん俺が何かしないか監視してるに違いない。ここで問題を起こせば相手の思うつぼだ。今日は運も良い事に先輩にも絡まれず、アホの大河原もいない。これはチャンスだ。ここでなにも起きなければ普通の学生だと思ってくれるだろう。そうしたら奴は俺をターゲットから外し大河原とかに移し替えるだろう。完璧だ。俺なら出来る。落ち着け浩美、ここは戦場だ。クールになれ！

「俺は真面目で優等生だから真っ直ぐ家に帰って勉強でもしようかな！」

わざとらしいくらい大声で独り言を言う。うしっ、良い感じだ。

てくてく家へ帰る最中、やっぱりついて来ている。すごく視線を感じるので、時たま不意打ちで振り返ると相手も目を逸らし鼻歌なんて歌ってやがる。こいつ演技へたっぴだな…こいつはこういう焦れたい作業は苦手なんだろう。真っ正面からぶち当たるようなタイプだもんな。でも、もうちょっとましな回避方法あるだろ。

それから帰り道で色々、真面目アピールをした。信号を渡る婆さんの手伝い、捨て猫に餌をやる（場合によっては悪い事と思われるから気をつけて）、落とし物を交番へ届けるなど色々して疲れた。下校ってこんなに疲れるもんだっけ？

それでも日向はずっとついて来ていた。ええい！しつこい。

「お前、いつまでついてくるつもりだ？」

「あら意外ね、私も」

「もうそれはいい」

話を途中で切られて怪訝な顔をしていた。

「俺について来ててもなんも起きないぞ」

「へえ、昨日は女子更衣室に忍び込んだくせに？」

「違う！俺じゃない。そもそもお前の体操スポンを盗んでなんの得がある」

「じゃあなんで私の体操スポンが盗まれたなんて知ってんのよ。全校集会ではただ女子更衣室で窃盗があっただって話しかしてなかったわよ？変態」

ふふん、と勝ち誇ったような笑みをする日向。

ぐっ、かまかけられた。知恵比べと口喧嘩では勝てない。学年委員長というのだから頭が良いのは明確。こうなれば体力で勝負だ。

「あっ！カバが逆立ちしてる！

「え？どこ？」

「じゃあな学年代表さん！」

日向が逆立ちしたカバを探している間に俺は全速力で走り出した。

「この嘘つき！しかも逆立ちしたカバってバカじゃない、待ちなさい！」

ようやく嘘だとわかった日向の怒鳴り声を背中で聞きながら猛ダッシュで逃げる。一応、体力には自信がある。相手は身体も小柄な女子中学生だ。振り切れない訳がない。

家はすぐそこだが、あえて遠回りする。振り切れないまま家へ帰ると家を覚えられて逃げる意味がない。

ぐるっと町内を一周した所で立ち止まる。ぜえっ、キツイ。後ろも振り返らず全速力で久しぶりに走りかなり疲れた。煙草やめようかな……さすがに巻いただろ。

「あんた意外に足速いのね。振り切られるかと思ったわ」

ギョツとして、おそろおそろ振り返ると日向がいた。頭も良いくせに運動も出来るのかこいつは。ってか普通ここまでやるか？

「あなたの家と名前を教えなさい。そしたら今日は勘弁してやるわ」

「いやだね」

「じゃああなたが帰るまで付いて行くわ」

この女マジでやりそうだから怖い。これじゃちがあかん。

「名前だけだぞ……名前教えたら今日は帰れよ」

「いやよ、家も教えなさい。不良生徒の情報の把握は学年委員長としての義務だわ。だから教えろ」

仮にも俺は（自分で言うのもなんだが……）髪の毛を染め、耳にはピアスし、つい先日は先輩と喧嘩して皆から不良だのヤンキーだのと言われている奴だぞ。そんな男と二人でいるんだ、何かされてもおかしくない。それなのに、怖がるどころか真っ正面からタンカを切ってくる。

あんまりやりたくなかったが、ちよつとこの世間知らずをビビらすか。女の子が嫌がる事をするふりをする、そうすれば俺が危ない奴だと思っ自分から離れて行くだろう。ヤンキーの下っ端みたいな真似だからやりたかねーけど、今後の為だ。こいつだっって人生に一回しかない青春を俺みたいな男の為に使いたかねーだろ。

「お前あんまり良い気になってんじゃねーぞ」

日向の手を強引に引っ張り近くの公園へ連れ行っった。

「え？なに？いきなりのなにすんのよ。離しなさいよ」
よしよし、ビビってる。なんだかノリノリになってきた。

公園に着いて引っ張っていた手を投げるように離すと日向は地面へぶっ倒れたが俺は逆にざまーみろと思った。

最近のストレスがなにかの拍子にぶちんと切れたのか、なんだか演技が演技で無くなっているような気もして自分が自分で無いような気がした。

もちろん直接手を出している訳じゃないが地面に這い蹲る日向への愚行はエスカレートしていった。

一時間はたってるな。辺りも夕日で綺麗なあかね色に染まってる。

「はあはあ……おら立て」

腕を無理矢理引っ張り上げ、立たして顔を掴んで顔を見ると涙が頬をつたっていた。こいつ泣いてたのか……罪悪感には膨張するが、今の俺はこいつが悪い、と思って吹き飛ばした。

「学年代表がこんな様とは情けないよな？それとも俺に手を出されるのを期待してたのか？だったらお望み通りにしてやるーか」

日向はギロリと大きな瞳で俺を睨んだ。

パァン！夕日で染まった公園に大きな音が響き渡った。

右の頬が熱い。じんわりと熱さが染み渡り、そこから痛さが広がる。
「いつ……てえ……」

俺は日向にぶたれたのか？痛みに頭が着いてこず……ただ混乱した。
「触らないで……ぐすつ、私に気安く触るな変態！私の事も知らないくせに悟ったみたいと言っくなクズ！お前みたいなゴミが周りに迷惑をかけるんだ！死ぬ死ぬお前みたいなクズはこの世から消え失せろー！！！」

日向は俺を押し倒しそのまま走っていった。

何が起きたかわからなくて某然と彼女の後ろ姿を見ていた。

なにしているんだろーな俺。女の子泣かせるなんて……クズと言われてもしかたない、最低だ。

でも、これであいつは明日から絡んではこないだろう。
いいんだこれで、間違った事はしたかもしれないが今後の為だ。
「誰に言い訳してんだか…」
立ち上がり尻についた土を払い落とす家に戻った。

「いいか、ヒロ。男は絶対に女の子を泣かしたら駄目だ、わかったな？」

「うん！わかった」

「お前は優しい子だ。身体が貧弱で病気もよくするけどな、それだけが強さじゃないんだ。優しい事はお前の強さ、男の強さなんだ。お父さんはヒロに強い男になってほしいんだ」

「僕、絶対に強くなる。泣いたりしないよ？お母さんやお姉ちゃんを僕は守るんだ」

「夢…か」

時計を見るとAM07:00と指していた。早起きしちまった…寝よ。

もう一度寝ようと布団に入ったが全然寝付けず、しぶしぶ制服に着替えて自分の部屋から一階へ下りるとキッチンからは朝の空腹で食欲をそそる香ばしい臭いがする。

「ヒロ、起きてたんだ。珍しい」

「うっせー。それより早く食わせろ」

姉貴が朝ご飯と二人分の弁当を作っていた。

「あんだねえ、それ人に頼む態度？」

姉貴は二つ上の中学三年生だ。ちなみに二つ下に妹もいる。この一軒家に兄妹三人で住んでいるのだ。贅沢なガキ共と思うかもしれないが放っておいてほしい。

姉貴は中学二年まで吹奏楽部をやっていたが、俺達兄妹を心配して

今はこうして家事を勤しんでいる。

昼から遅刻する日や行かない日もあるのに俺の分も毎日作ってくれている。

「優は？」

「まだ寝てる。まったく誰に似たんだか……」

やれやれといった感じで妹を起こしに行った。

「じゃあ、俺先に行くぞ」

二人分の弁当を一つ手に取り家を飛び出した。

昨日の事が頭でモヤモヤする。あいつ泣いてたな……いや、あいつが悪いんだ……よな？

でも、これであいつに絡まる心配はない。これが俺の望んだ結果だ、問題ない。

しかし、自己暗示をかけようと足取りが重い。学校に行きたくない。学校で日向とすれ違う度に気まずい雰囲気になり、きっとあいつは俺を避けながら学園生活を送るんだろうな。

そんな事を考えてるうちに学校に着いてしまった。上靴に履き替え教室へと向かった。

「あら、不良で変態のくせに今日は早いじゃない」
教室で待ち受けていたのは日向だった。

何故彼女が俺の前にいるんだ。昨日された事を覚えてないのか。いや、覚えてないはずがない、一生のトラウマまでとは言わんが心に傷が付いたのは確かだ。それなのにどうして？……まっ、まさか！こいつ……生粹のMか！？……な訳ないよな。

「……さつき『あいつは俺を避けながら学園生活を送るんだろうな』って言ったばっかりなんすけど」

「知らないわよ。月野浩美、あなたの事は調べたわ。名前、クラス、出席番号、その他もろもろ……」

げっ、マジかよ。まあ普通に考えたら一緒の学校なんだし、学校で

調べた方が早いよな。

「ついでに住所も」

「ちよつと待て。住所は誰に聞いた？場合によっちゃ個人情報保護法違反にもなるぞ」

「大河原くんよ」

あのヤロー！後でしばく。

「家族構成、家族関係とかも不良を更生させるのに必ず必要になる情報だから大河原くんに聞いたけど、知りたかったら本人に聞け、つてこれだけは教えてくれなかつたわ。まあプライバシーに関わるかしらね…つて事で家ではどんな感じか詳しく述べよ」

「……プライバシーがどうのつて言つてなかつたか？」

「本人に聞けば問題無いわよ」

なんだその無茶苦茶な理由は。登校中、悩んでたのが馬鹿らしくなるほどムカついた。

「とにかく家の事情はプライバシーだ。話す意味も教える義理もない」

そこで日向は隠し持っていた切り札を出すような不適な笑みを浮かべた。

「私もこの二日でなにも学んで無い訳じゃないわ。あなたがそう言うつて事すでに計算済み…私に教える義理が無い？ふふっ、ならば

……私と付き合いなさい！！！」

地球、いや世界中の時間が止まったかと思つたね。実際、教室内は凍りついていた。

「……………は？」

噂は瞬く間に学校中へと広がつていった。

それもそのはず、日向は才色兼備の美少女だけあつて上級生からも人気があり、学内では知らない者もないほどの有名人だ。かく言う俺も入学早々、問題ばかり起こしているので学内では有名人だった。

その不良少年に、成績優秀、スポーツ万能、才色兼備の一年代表の美少女が朝イチ教室で堂々と告白したのだから無理もない。

その日は学校中の男子生徒の視線が殺気だっていたのは言うまでもない…のか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7169x/>

この街の片隅で

2011年10月24日03時05分発行